



とことろ あさお / 昭和44年(1969年)生まれ。美術家。小学5年生まで新宿区中落合で過ごす。東京造形大学卒業、建築専攻。平成13年9月11日以降「繋げる」をテーマに紋様を制作。美術から建築までジャンルを超えて活躍している。

伝統の色と柄で日本を表現

区長:野老さんが手がけられた東京2020オリンピック・パラリンピック(以下、東京2020大会)のエンブレムは、四角形がたくさん組み合わさっていて、シンプルながら、とてもよく考えられているんですね。

野老:ありがとうございます。2つのエンブレムは、大きい四角形が9個、中くらいのと小さいのが18個ずつ、合計45個を組み合わせています。3つの四角形を用いて、両方も同じ数で作っています。東京2020NIPPONフェスティバル(大会公式文化プログラム)マークも同様です(右下写真)。僕はこの約束事を「律」と言っています。スポーツで言えばルールですね。俳句の五七五もそうですが、一定の縛り、つまり律があるからこそできる事柄を示したいと思いました。

区長:私は市松模様になっているところに日本らしさを感じました。四角形がつながってできているのがデザインの特徴ですが、どのようなメッセージを込めているのですか。

野老:四角形のつながりで作った輪には、「多様

性と調和」というメッセージを込めています。違う物が組み合わさって、一つになるということ。多様性は東京2020大会のメッセージの一つで、「ダイバーシティ」とも言います。新宿はダイバーシティのまちですね。

区長:おっしゃるとおり、様々なバックボーンの方が多くいらっしゃる、多様性のまちです。野老さんがエンブレムに込められた多様性の中に一定の法則があるというのは、人類全体の普遍的なルールも示していると思います。エンブレムの持つ意義を考えることで、多様性を考える。これが東京2020大会のレガシー(遺産)となっていくといいですね。では、藍色1色にしたのは何か理由があるのですか。

野老:神聖なものを作りたいと、1色にしました。藍にしたのは、何年経っても残る強い色にしたかったから。黒に次いで退色しにくいんです。日本の伝統色でもあり、庶民の色なんですね。東京開催を機に、文化が花開いた江戸の紋様を復興したいという願いも込めています。それに、青を愛でる国はいっぱいあるので、色への気持ち共有しやすいと思いました。



「2つともパーツの総量は同じなんです」と、野老さんが木製の模型でエンブレムのしくみを説明。



日々変わる新宿にワクワクした

区長:野老さんは新宿のご出身ですが、子どもの頃の新宿の様子を覚えていますか?

野老:ええ、超高層ビルが建ち始める頃で、近くの高台からはそれこそ、よきよきとビルが建っていくのが見えました。僕は中落合に住んでいたのですが、空き地ができたと思ったら、すぐに何かができる。その変化をポジティブに捉えていました。ずっと、工事中でしたが、ワクワクしていました。

区長:何ができるんだろうって、子供心に楽しみでしたね。私は野老さんより少し下の世代ですが、何棟か建った高層ビルはよく覚えています。今もそうですが、新宿は10分も歩くと違う顔になりますね。そんな街の雰囲気は野老さんの仕事に影響していますか。

野老:技術的なことに関しては、父が建築家で、

母がインテリアの仕事をしていた環境が影響していると思います。近くに新しい建物が建つと、工法などを父が解説してくれましたので。デザイン的なことでは新宿で育ったことの影響はあると思います。僕が住んでいた中落合には画家のアトリエがあったり、赤い鳥運動の方々の家があったり、文化的に希望を持った郊外でした。そこで芸術に関する憧れを感じていました。新しいビルができる工業的な面と、芸術的な面、そして一方で、歌舞伎町のような賑わいもある。いろいろなものが混在しているおもしろさが新宿にはありましたね。

区長:新宿区のほとんどのまちは戦争で一度焼け尽くされましたが、落合は空襲の影響がなく、古い家が残りましたからね。芸術の息吹を感じる一方で賑わいにも触れていた。その感性が野老さんの多様性に満ちたデザインを生み出しているのでしょうか。

2020年以降もつながる取り組み

区長:東京2020大会まであと1年となりました。オリンピック開催にあたっては、文化プログラムも開催しなくてはなりません。区でも新宿クリエイターズ・フェスタなどを開催しています。先日、西新宿にある野老さんの作品「ドラゴンフラワー」を拝見して、同じ形がつながっていくという作風が続いていらっしゃるんだなとわかりました。

野老:新宿110ビル(西新宿1-10-2)にある2013年の作品ですね。ひし形の組み合わせで作っていますので、今につながっていますね。

区長:東京2020大会以降、エンブレムのデザインを更に展開する予定はありますか。

野老:東京2020NIPPONフェスティバルのコンセプト映像の制作に、ディレクターとして関わらせてもらいました。その映像には、作図の背景にある数学的な仕組みがかなり盛り込まれています。これまでのエンブレムにはなかった広がりがある、そこから生まれるのではと期待しています。アスリートとしてオリンピック・パラリンピックに出られる人はほんのひと握りですが、その時間を共

よしずみ けんいち / 昭和47年(1972年)生まれ。新宿生まれの新宿育ち。平成26年より新宿区長となり現在二期目。高校時代は陸上部に所属。中・長距離走を専門とし、毎日フィールドで汗を流した。2020年、新宿区内で陸上競技が開催されることに、期待に胸を躍らせている。



有したり、次の世代に伝えていくことはできる。何事もなく終わるのではなく、大会後も色々と伝えていきたいと思います。また、50年後に日本で開催されることがあるかもしれませんから。

区長:そうですね。新宿区では大勢の方が来られるこの機会にどのように対応できるのか、特に子どもたちに外国の方にも対応できる力を身に付けてほしいと考えています。困っている方がいたら手を差し伸べられるよう、心のハードルを超える力を残していきたいと思います。

野老:あとから見た時にどういう年だったのかは、今やっていることが反映されていくのだと思います。前回の東京オリンピックの時には、日本の建築技術が一気に高まりました。東京2020大会からも知恵の伝承をしていくことが大切だと考えています。

区長:その知恵を伝えていくことが、さらに、誰もが普通に暮らせるダイバーシティにつながっていくきっかけになることを期待しています。この大会だけで終わるのではなく、レガシーとできるようにしたい。のちのち、2020年から変わったと言われるようになるといいですね。



東京2020NIPPONフェスティバルのコンセプト映像を紹介する野老さん。